吉野川歴史探訪　水防の知恵と信仰　その3

～暮らしの知恵「城構えの家」、水除け争いと「印石」～

お疲れ様です。別宮川三郎です。ゴールデンウィークもあっという間に過ぎ、だんだん暑さが厳しくなってきました。ネクタイを外してクールビズ、ウチワで何とか暑さを凌いでいる今日この頃です。

さて、水害から自分たちの命と生活を守るために長い経験の中で培われてきた水防の知恵の一つに「城構えの家」があり、現在も吉野川沿いで多く見られます。また、堤防をめぐる村々の争乱をおさめるために埋め込まれた「印石」も残されています。これらの洪水遺跡は、過去の歴史探訪でも触れていますが、今月号は、「水防の知恵と信仰」その３として、少し詳しく探訪したいと思います。

１．　洪水に備えた家づくり　「城構えの家」

吉野川中下流域の氾濫原には、石垣で高く築いた地盤の上に、門、母屋、納屋、土蔵などを配置した家が散見できます。その姿は、小さいながら城郭のように見えることから「城構えの家」と呼ばれています。初めて訪れた人は「ずいぶん豪勢だな」と思われるかも知れませんが、これは、洪水によって家が流されたり浸水するのを避けようとしてつくられた水防建築物なのです。石垣には徳島特産の「青石」（緑色片岩）や「撫養石」（和泉砂岩）が使われ、石垣の高さは高低さまざまですが、高いものは３ｍを超えます。こうした「城構えの家」をつくれるのは、かつての吉野川流域で栽培された「藍」を取り扱う商人（藍商）などの裕福な家に限られていました。

代表的な「城構えの家」は、名西郡石井町高畑の田中家（写真１：国指定重要文化財、田中家住宅）、名西郡石井町天神の武知家（写真２）、美馬市穴吹町舞中島の大塚家（写真３）、板野郡上板町瀬部の武知家（写真４）などがあります。（図１位置図参照）

なかでも大規模なものが石井町高畑の田中家であり、江戸時代から「すくも」や藍玉を製造販売してきた藍商の家で、今でも全盛時代を思わせます。田中家の石垣は、南北50m、東西 40m という広い敷地の周囲を青石や撫養石を使い緻密に積まれています。

また、石垣の高さは、吉野川の洪水がやってくる方向ほど高くなっています。なお、母屋は茅葺きで、洪水で水が屋根までくると屋根が浮き上がり舟の代わりになるようにできています。建物は、母屋を中心に土蔵、納屋、番屋、座敷、藍の寝床など敷地内 11 棟が完成するまでに約 30 年歳月をかけたと言われています。このように、多額の費用と歳月を費やしても大規模な「城構えの家」が建てられていることは藍商人の裕福さと、吉野川の洪水のすさまじさを物語っています。

写真１ 田中家（名西郡石井町高畑）

写真２　武知家（名西郡石井町天神）

写真３　大塚家（美馬市穴吹町舞中島）

写真４　武知家（板野郡上板町瀬部）

図１ 位置図

また、こうした水防建築は、人家ばかりではなく神社にもみられます。アインシュタインの友情の墓標（参考１参照）がある寺として知られる美馬市穴吹町舞中島の光泉寺も高い石垣のうえに建てられています。（写真５）

吉野川の氾濫原に住む住民達は、知り合いの「城構えの家」、高台に建てられた寺社などを洪水時の避難場所に決めておき、大洪水が予想されるときには、いち早く家族、牛馬を伴い、そこへ避難したと言われています。「城構えの家」は吉野川流域を代表する貴重な洪水遺産といえるでしょう。

【参考１：アインシュタインの友情の墓標】
美馬市 HP を参考に記載

世界的外科医の三宅速氏は、慶応２年(1866)に徳島県穴吹町舞中島の医家に生まれました。大正 11 年(1922，56 才)、三宅氏が欧米視察旅行から帰途の船中、ドイツの理論物理学者アインシュタイン博士の急病を治療するという奇縁からお互いに親交があり、三宅先生夫妻の戦争による死を悼んで、アインシュタイン博士から自筆の哀悼文が寄せられました。穴吹町舞中島光泉寺境内のアインシュタイン友情の碑に碑文が刻まれています。

写真５ 光泉寺（美馬市穴吹町舞中島）

写真６
アインシュタインの友情の墓標
（美馬市穴吹町舞中島）

○世界的外科医 三宅速（はやり）氏

慶応２年(1866)徳島県穴吹町舞中島の医家に生まれる。12 才の時上京、25 才で東京帝国大学医科大学（現東大）卒業後、徳島市で三宅病院創立。33 才でドイツに留学、ミクリッツ教授に師事。胆石症の研究により一躍世界的な医学者となる。

帰国後、35 才で大阪府立医学校(現阪大)の付属医院外科医長、続いて福岡医科大学(現九州大学)に赴任、ドイツ留学。38 才で福岡医科大学教授。明治 43 年(1910)、九州帝国大学初代外科部長に就任。指導者としても信望が厚く、名実ともに内臓外科の名手と絶賛された。

昭和 11 年(1936)ドイツ外科学会国外会員、昭和 18 年(1943)には、日本外科学会名誉会頭に推挙されるなど、日本における外科学の開拓者として活躍し、昭和 20 年(1945)米軍空襲により、岡山県において没す。(享年 80 才)

写真７ アインシュタインと三宅医博
欧米視察旅行から帰途の船中

2.「水除(みずよ)け争い」と「印石」

藩政期の堤防は、藩主導で築かれた蓬庵(ほうあん)堤、藤森堤は、現在で例えるなら行政レベルで築かれた堤です。これに対して、監物(けんもつ)堤、六条堤などは、一つの村か複数の村が協力して、自分たちの地域を守るために住民によって築かれた堤です。いわば地域レベルの治水です。

このとき重要な役割を果たしたのが、地方の組頭庄屋などの村役人でした。彼らは築堤や修築にあたって、村の総意を代表して郡代に願いや意見を具申しました。しかも願いが聞き入れないときは、命がけで藩に強訴することもありました。

最後に自殺という道をたどった新居嘉藤治(にいかとうじ)や、藤森堤の築堤にあたって村人に過重な労役を課して切腹した貞光代官原喜右衛門(はらきえもん)。さらに藩の許可無く一夜で堤防を築き、その責を負って割腹した稲垣監物(いながきけんもつ)など築堤に命を賭けた義民の話が数多く残されています。（Our よしのがわ Vol. 6．VOL.7参照）

こうした悲劇のほかに、堤防が原因となって川の上流と下流、あるいは右岸と左岸の村同士で争った話も沢山あります。下流を守る堤防は、上流の村にとっては邪魔な存在であり、下流域の人々は少しでも堤を高くしたり、強くしたいと思う一方、上流域の人々は、それを阻止しようと努めました。

当然、築堤にあたっては、藩に願いを出して、村同士で話し合いを持つのですが、利害が対立し、まとまらない場面が多くありました。その結果、無断で堤を築いたり、誰も見ていない隙を見て、堤に土を盛ったり削ったりという手段に訴えた結果、村ぐるみの紛争に発展しました。この争いが長引くと藩が調停に乗り出し、対立する村の間で一定の取り決めをして決着を図ることもあり、その一つの方法が「印石」なのです。今もなお、各地に残る「印石」について探訪しましょう。

（1）石井町高畑の「印石」（産(うぶ)神社）

名西郡石井町藍畑に中須という地区があります。昔は中洲といって、文字どおり吉野川と新宮川に挟まれた洪水常襲地帯でした。一方、新宮川の南には元村という地区があり、かつて、この隣り合う高畑村内の２地区で「水除け争い」がありました。

元村地区は中洲地区よりも地盤が低く、洪水よって度々冠水したため、農民は新宮川沿いに新堤を築きたいと藩に嘆願し続けていました。これに対して、中洲地区の人々は、堤防ができると水が中洲地区に滞留する危険性があるため、築堤に異議を唱え、長い間争いが絶えませんでした。嘉永４年(1851)、郡代は両者の話を聴いたうえで、元村地区の人々に、中洲地区の土地の高さと同じ高さの堤防を築くことを許しました。その結果、高さ３尺あまり(約 90cm)、幅４～６間(7m～11m)の新堤が完成しました。

ところがその後、嘉永(かえい)６年(1853)元村地区の人々はこの堤防に土を盛ったため、再び争いが生じました。藩は、元村地区の人々に上積みした土を撤去するように命じるとともに、今後争いが起こらないようにと、石柱の上部に決められた堤防の高さを示す横棒１本と「印石」という文字を刻み、その石柱を堤防の各所に埋め込みました。中洲の皇太神宮という小さな社の横にある石碑は、この時の経緯を記したもので、それによると印石 21 個を堤防各所に埋設したとされています。そのうちの一つが平成８年(1996)に完全な形で発見され、現在、石井町藍畑の産神社境内に設置されています。

【参考：中洲地区でみつかった印石。定説が崩れる？？？】

産神社境内に設置されている印石は、発見された場所が産神社西方の畑、つまり、東覚円村で発見されており、皇太神宮の石碑に記された 21 個の印石ではない可能性を示唆する研究者もいましたが、高畑元村地区にあった印石を実際に見たことがある古老の話では、発見された印石の様式が、元村地区に埋設されていた印石と同じであったとのこともあり、高畑村中洲地区と元村地区の「水除け争い」の調停のため堤に埋められた 21 個の一つであるとされているようです。

しかし、最近になり、「水除け争い」の紛争地であった中洲地区の民家から印石が見つかりました。この印石は、これまでの定説を覆す可能性があります。発見経緯について、所有者である森さんにお話を伺いましたので紹介しましょう。

森さんは、平成 10 年頃に自宅を建て替えるため、北側の畑で基礎掘削工事をおこなっていたところ、工事業者の人が細長い青石を発見しました。工事の邪魔になるため、青石を撤去すべきですが、発見場所が松熊神社の隣ということもあって、工事業者は厄災を恐れ撤去をためらったのです。

このため、森さんご自身が撤去したところ、青石は縦 120cm、横 25cm、厚さ 10cm の直方体に近い石柱でした。また、撤去後、青石についていた泥を水で洗ったところ、「印石」という文字と横棒の彫り込みが出てきました。また、背面には漢数字で「六」という刻印がありました。産神社の印石と比べると同じ青石ですが、かたちも大きく異なり、風化の程度が異なっています。

森さんは、「印石」のことをご存じで、捨てるに捨てられず、ご自宅の庭に埋め込んだそうです。もし、発見者が森さんでなければ、現在、残されていなかったかもしれません。それから約２０年が経過し、地域の研究者を通して、私もその存在を知ることとなり、森さんを訪ねお話を伺い、今回紹介させていただきました。

まだ、断定的なことは言えませんが、私の個人的な意見としては、①紛争地である「中洲」から発見されたこと。②「六」という漢数字が皇大神宮の石碑に記された 21 本のうちのひとつを示す刻印の可能性があること。③さらに、皇大神宮の石碑は下部がコンクリートで固定され全文が不明ですが、石碑左文章下部の「平地土地一尺・・・・」の一尺の意味が、印石を堤防より一尺高くしたという意味であれば、今回発見した印石の横線の刻印から上の長さが 30cm、つまり一尺であることから石碑文と合致します。

状況証拠に過ぎませんが、当時、印石は次頁のようなかたちで埋設されていたかも知れませんね。見つかった印石は、当時の「水除け争い」示す重要な洪水遺跡であり、その設置経緯も含めて後世に伝えていきたいものです。

写真８ 高畑中洲の印石

図２ 「水除け争い」周辺位置図

高畑中洲地区と元村地区の「水除け争い」のイメージ図（筆者推定）

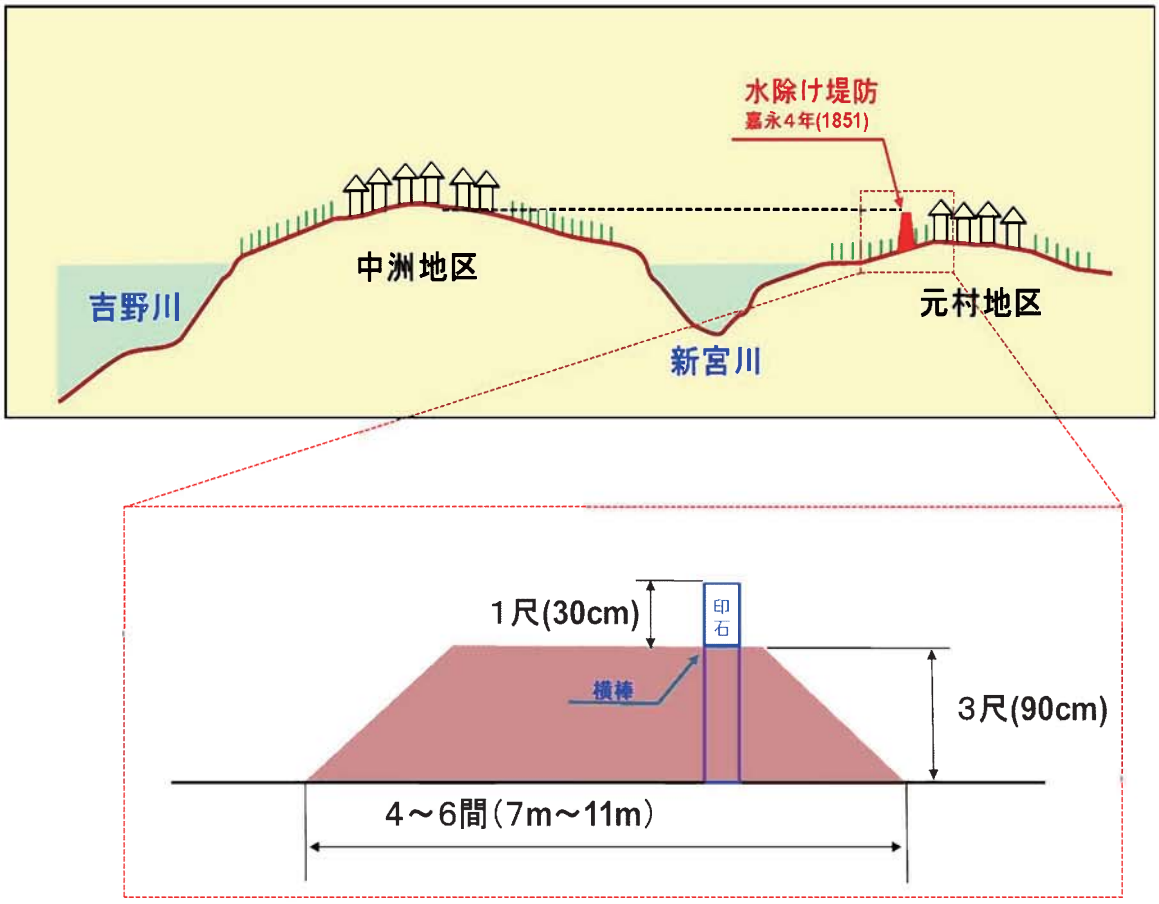

図３「水除け争い」イメージ図

（２）鳴門市大麻町の「印石」（渕ヶ上堤防）

鳴門市大麻町に大谷川という川が流れています。この左岸に渕ヶ上堤防と呼ばれる低い石巻堤が南北に走っていました。渕ヶ上堤防は、姫田字里（鳴門市大麻町）から大幸（同市大津町）の正因禅寺に至る小堤で、明治末期から昭和初期に行われた吉野川第一期改修工事などにより、その役目は忘れ去れていますが、それ以前は、この堤防を挟む西の牛屋島村と東の大幸村の利害関係が相反し争いの絶えない堤防でした。つまり、渕ヶ上堤防の西に位置する牛屋島村は、堤防を低くして洪水の早期排水を望み、大幸村は、堤防を高くして洪水の流入防止を望んでいました。村同士で争っていた頃、渕ヶ上堤防に印石が置かれたという記録があります。

寛政年間の大谷川の洪水は両村の一大闘争となり、牛屋島村の善太、幸内、豊助、高畑の善作が、徳島堀裏の藩牢に入牢を申しつけられて、寛政９年(1797)に相次いで亡くなったことが、「渕ヶ上騒動犠牲者の碑」に記されています。百年以上の争いになったこの騒動は「渕ヶ上騒動」と呼ばれ、勝浦、板野郡代や明治になると板野郡長の調停によって、堤防の高さばかりか、堤の上に生えた竹・木・雑草などを、どちらの村がいつ刈り取るといったことまで、村同士で厳重な規定を交わしていました。

また、印石の記録として、松浦家文書（鳴門市史）によると「明治 23 年(1890)年10 月４日、水越石巻堤の印石はこれまでどおり存置。新たに、50 間（約 90m）ごとに印石（長さ３尺六寸仕立、石巻堤より１尺分高くした）を新設」とあり、印石が新たに設置されたことがわかります。現在、堤防上に印石が６箇所残っています。

渕ヶ上堤防がいかに小堤防とはいえ、土地を命とした農民達にとって、その存在は死活問題だったと言えます。村民の安全をかけた必死の交渉と妥協の洪水遺跡として歴史を伝えています。

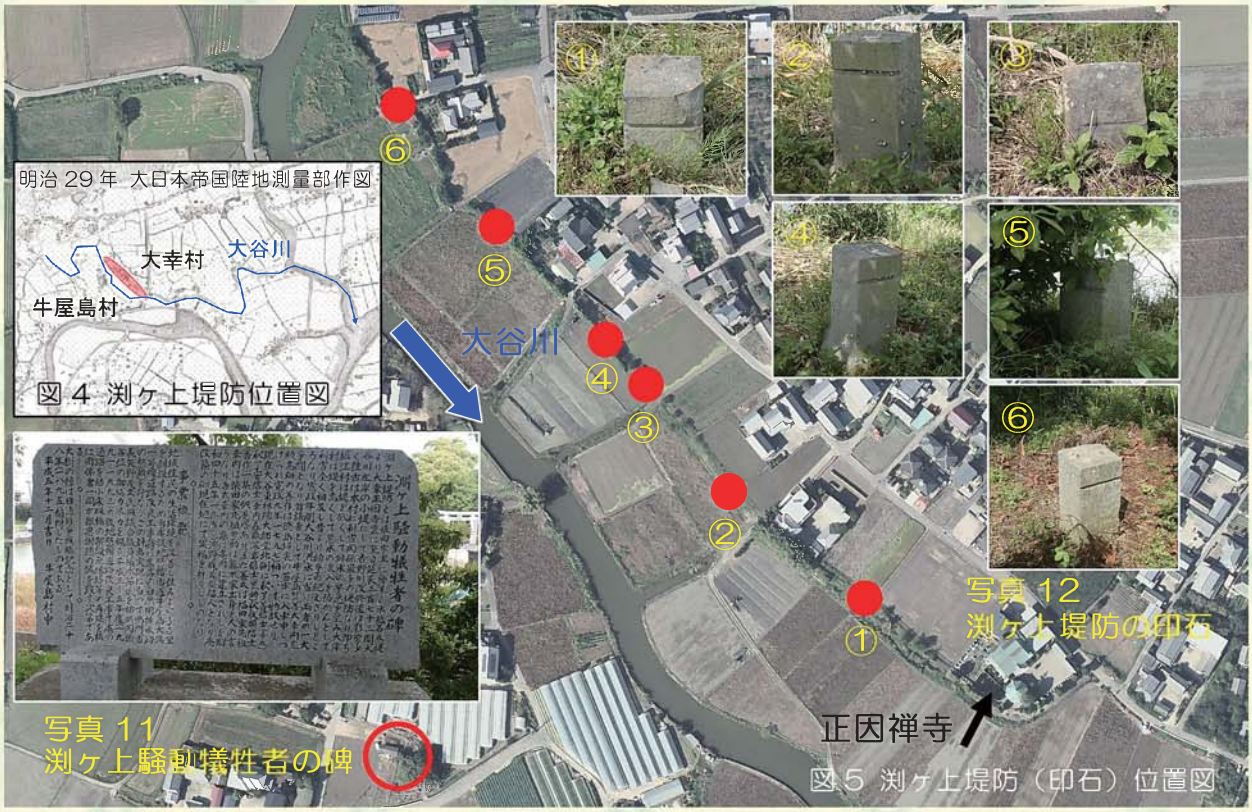

図５ 渕ヶ上堤防（印石）位置図

（３）藍住町矢上（春日神社）の「印石」

吉野川と旧吉野川に挟まれた藍住町の北部には、旧吉野川（かつての吉野川）から分かれて、正法寺川につながる一本の川があります。この川からの氾濫を防ぐため、東側の板野郡矢上村が行った堤防普請に関して、寛政８年(1796)７月、その堤防によって水害が増加する西側の本村、成瀬村、竹瀬村の３村と矢上村の間で訴訟沙汰になりました。寛政 11 年(1799)に示談が成立し、矢上村が堤防の一部切り下げに応じました。

竹瀬村庄屋の木内家に残された文書（仕上ル書物之事）には、堤防切り下げ後の紛争をさけるために、堤の高さの基準となる印石が９本設置されることや印石の設置場所が詳細に記されています。

印石の存在は、木内家文書（仕上ル書物之事）から分かっていましたが、長らく実物の発見には至っていませんでした。しかし、平成 27 年６月に友人の高田恵治氏が春日神社境内の南東の角で初めて発見し、また、同氏は翌年に神社東側垣根の中から１本発見しました。さらに、同氏は、私が原稿を書いている最中の５月 16 日に地元住民からの聞き取りにより３本目を見つけたとの連絡が入り、その３本の位置関係と木内家文書（仕上ル書物之事）に記された９本の位置から残り６本の位置を推測したとのことでした。今後、機会を捉えて高田恵治氏の研究成果を皆さんにお伝えしたいと思います。

現在、この地域は吉野川の洪水から切り離され、飛躍的に安全度が向上し発展を続けており、水害が長らく発生していません。しかし、かつては、洪水や水害が地域にとって身近なもので、村々間で「水除け争い」が存在したとは考えにくい状況になっています。今回の発見を通じて、この地域の洪水遺産として伝承し、水害を我がこととして捉えられるよう、防災教育に役立てたいものです。

図６　位置図及び平面写真

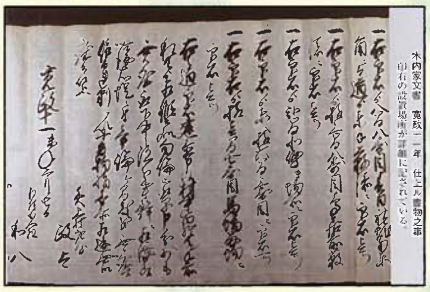

写真 13 木内家文書（仕上ル書物之事）
徳島県立文書館「暮らしの中の吉野川」
特別企画展のパンフレット P7 より

写真 14
春日神社境内南東の角で発見した印石

今月号は、城構えの家、印石について探訪しました。「水防の知恵と信仰」シリーズは今回で終了しますが、印石は現在も調査中です。何か新しい発見があればご紹介したいと思います。来月号では、戦後の吉野川改修について探訪したいと思います。